『雑草と野草―― 一本か二本のバラと共に』

ハーマン・メルヴィル 作
藤江　啓子 訳

雑草と野草

第３部　リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック（Rip Van Winkle's Lilac）

（1890年２月13日付けの原稿より）

幸せの木陰へ（To a Happy Shade）

今や体を持たせかける楓の木の下で、作品において優れているだけでなく、人生においても快く愛に値するあの円熟した名声不朽の人々と、名声のインディアンサマーを分かち合う。ああ、ワシントン・アーヴィングよ、あなたが後にした文学の館に誰がたまたま侵入しようと、あなたはほとんど意に介さないだろう。幸せの木陰よ、あなたの心の子供、リップ・ヴァン・ウィンクルの物語に何か捧げ物を出しゃばってしようとしても、ましてや心を煩わすことはないだろう。それどころか、たぶん、私が執筆しているところにあなたのヴィジョンが届き、そしてほかでもないあなたに私が霊感を受けるのを見てあなたの精霊が喜ぶだろう。

リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック（Rip Van Winkle's Lilac）

夕暮れ時、葉の繁る６月、キャッツキル山脈の暗いチョウジあるいは渓谷から、山々の内奥の窪地での長い眠りにぼっとして、善良ではあるが役立たずが、川の方へ現れ、高地の草原へやってくる。孤独に足をひきずる音を聞いて、まぬけの若い子牛が、夏にはぽつねんとしていたが、彼が通り過ぎると、草のあいだから突然頭をもたげ、驚き仰天した。

彼はさらに下へ降りて、ばらばらとまとまりなく耕作された畑にやってくる。だが、まだ家は見えなかった。そして間もなく、田園的高台を寂しく囲む、木こりが通る曲がりくねった道にでた。その道には大部分塀がなく、夏にはほとんど誰も通らな

いので、自然の芝地に長く平行したくぼみにかすかな轍の跡が辿れるだけであった。呆然とした男は、この斜めに降りる道が家路へと向かう別のそれほど険しくない道とつながっていると、ぼんやりと思い出す。確かにそうだった。というのも、間もなく彼は交差点に来た。そこで彼はその交差点のみで完全に見える光景を認めて驚いて立ち止まった。彼の記憶に深く刻み込まれた光景。獣や鳥を狩りに遠出した時に、何度も心惹かれた光景だ。長いチョウジの並木道の遠くの果てに見え、遠くの青い山頂がそれほど高くも遠くも青くもない山並み越しにそびえる光景だった。決して正常ではないリップの今の心境には、その山頂は、何か異常なものをよりよく見ようと群集のなかで爪先立ちになる人のように見えた。詮索するように緑の荒野越しに彼を調べ、このように言っているようだった――　一体お前は誰だ？　どこから来たのか？　この気まぐれで不安な想像は哀れなリップにとって苦痛だった。彼としてはよく覚えていたあの山は、彼のことを忘れてしまったのか？ 全く忘れてしまったのか、それも一日で？　だが近づく夕暮れが草や低木からの芳しい匂いで彼を元気づけた。道を進みながら、しばらくして彼は少なくともその辺りでは全くはじめての香気に気がついた。一軒ぽつんと他のものからは離れて立っている彼の家に近づくにつれて、より一層漂う香しさであった。突然、道の曲がり角で、家が視界に入った。ここで、そこに今は何かがなくなっているが、全く別のものが見えるので、彼は驚き、立ち止まった。そこでは、彼のぼんやりとした記憶によれば、家の日の当たる後ろ側でナデシコやホリホックの咲く小さな一区画を除いては、あたりには花は咲いていなかったのだ。それは夫人が世話する小さな庭で、ほら、並外れて大きく背の高いライラックが、開いたドアの近くで、満開に咲いており、太古からの柳が占めていたと記憶していた場所をほとんど取って代わって占めていた。

今やリップの粗末な住処は、板張りの木造で、彼が覚えている限りでは、住めるものではあったが、部分的にはまだ完成していなかった。その建造者で最初の所有者は、ある正直なきこりで、最後の仕上げをしようとした時に、聖書が多くの館を保証するあの世襲の家にいる彼の先祖と一緒になるよう呼び寄せられた。こうして突然家の建造を停止したので、家の外側はだらしない造りであった。風雨は安全にしのげたが、木こりの相続人、最も近い親戚であるほかでもないリップのための新婚の亭にはふさわしくなかった。リップは相続に力づけられ、大胆にも実生活の大冒険、結婚に乗り出した。そう、最初の住人はリップと彼の花嫁だった。魅力的な愛くるしい花嫁だった。結婚の持参品は、衣装ダンスが１つ、台所用品がいくつか、ベッド、そして紡ぎ車だけだった。美人で、綿毛のような頬、黒い両目、時々いたずらっぽく瞬くが、２つの柔らかい黒スミレのようにパチパチすることは、見たところ出来なかった。

その家に住んで、数日後、低い声で囁く松林のロマンティックな散歩から夕暮れに帰り、リップは今や故人となった甘い母親の記憶を愛する妻にしみじみと話すと、妻は突然話題を変えた。未完成の家を指さしながら、彼女は花婿に家を整えるために必要なことをすぐにでも出来るではないかと感じよく言った。愛しいリップはちょっとした大工ではなかったか？ だがリップは不意打ちを喰い、カタカタいうハンマーやギーギーいうノコギリはハネムーンの静かな魅力には邪魔だと言って穏やかに何かを申し立てた。未来のためには果樹園に着手する方がいいだろうと思い、彼は間もなくそうした。「ねえ」と彼は終わりに臨んで言った。腕を彼女のすらりとした腰に回し、「ねえ、時が来れば、ノコギリとハンマーをとるよ」と言った。その時とは非常に遅かった。実際その時は来なかった。だが、良きにつけ悪きにつけ、時は永続的で、決して止まらず、そうすることによって素晴らしい変化や変貌をもたらす。間もなく花嫁は女将となり、花婿はあの陳腐な存在、既婚男となった。恋人の時は未経験の乙女の愛情を勝ち得た好もしい性質のいくつかは、夫としては実際的な能率に欠く望ましくない点となった。生まれながら財産には恵まれず、それゆえに、この世で出世するためには、そうする好もしさにかかわらず、肘で押し分けて進む必要があった。そうするかあるいは蛇の邪悪な知恵に訴えるかであった。

十分だ。未完成の家や結婚生活の複雑さに慣れない住人同様、事態は自然な道筋を辿った。リップの財源はいつも尽きていたので、家は塗料で保護されることはなかった。そこで、北側には灰色の風雨によるしみが際立ち、夫人がそれを責め立てた。もっとも、ついにこのようなことになったことについては、厳然たる功利主義的見解に起因したわけでもなかった。

女性は、男性よりも老年を嫌い、最も謙虚な人でも、老年を暗示するものに、敏感である。その風雨による灰色のしみは家に老年の様相を与えただけではなかった。最近建築された明らかな証拠と関連して、その家は侘しいほど人間の様相を呈していた。早く老けてしまう人のようであった。羽目板同様屋根を見ると若さの精神が欠如していることがわかった。若さの精神は、いかに個人の運命が大変でも、我々よりも楽園の精神を多く受け継ぐ女性が、全てのもののなかに認めるものである。そこの屋根板は、屋根板ふきの支柱とともに、リップの怠慢によって間に合わせのままになっていた。数回秋が過ぎて薄い苔が生してしまい、とりわけ未完成の部分は、大きな柳の木が未完成だと嘆くので、苔が生えるのだった。その柳は泣いているようなシダレヤナギで、その木陰に家はもともと建てられたが、今や無くなっていた。腐った枝の折れた小片や色あせた葉のくずが、この老いたエレミアのそばで、不運にも完成されないままになった家の常緑の屋根の上で絶えず泣いた。

それほどむさ苦しい老いた住人はいつもヴァンウィンクル夫人の嫌悪の的となっ

た。そして、もはや花婿ではないリップは、彼女の強制的な命令に従って、決して鋭くはない斧で切り倒そうとした。だが、必要な精力的な一撃は彼の頭蓋の生来の無活動に痛くさわるもので、不面目にもやめてしまった。憤った夫人は自分で切り倒そうとした。だが、こぶのような幹は巨大な直径をし、こぶの下では、鈍く柔らかな粘りがなまくらな斧にはほとんど手に負えなかった。要は、尊ぶべき老木は、頑固な無活動が突発的な活動や役に立たない道具に対して否定的な勝利をおさめた記念碑として長く残った。

だが、絶えず進み決して研ぐ必要のない大鎌が、ついにそのように進みその老兵を土に導いた。そう、リップが森で眠っている間、こぶだらけの老いた住人は先祖の仲間入りをしたのだった。幸運にも家からは離れて倒れ、それ自身の記念碑となった。確かに絶えず崩れるが、それだけ一層春は優しく衣装を纏う。ところどころ苔が生え、円熟した朽木の焦げ茶色の塚、あちこちに芽を出す野生のスミレがそこが故人の場所であり、その木が倒れた場所であることを証明する。だが、見よ、低く老朽した庇の上に芽を出し、ライラックが今や笑っていた。そこは慰めようもない柳が泣いていたところだというのに。老いた柳の黄色い葉の代わりにライラックは束になった花のピンクの小さな釣鐘のような花びらを緑の屋根の上に軽やかに落としていた。リップが再登場して見ているように、森から見ると、今や住人のいない廃墟となった最近の住処の陽気な部分的な衝立となっていた。中央の棟木の取り付けによってついに豚背型となり、ゆっくりと腐朽するにまかせ、体面の欠如に報うために、あわれなリップを含めて不面目な幽霊の夜毎の集合場所といったスキャンダラスな名前を持っていた。それにもかかわらず、彼の悲しい衰弱と不面目にもかかわらず、次のような事件が示すように、この荒廃した地所には何か埋め合わせるような魅力があるにちがいなかった。というのも、興味深いのでこの大事な時においてさえ、その事件を挿入するのが正当だと思う。

山の森にリップが消えて久しい開花の月に、低地の土の下に妻がもっと不思議な消滅をした後に、ある瞑想的な放浪者、すなわち、若い芸術家が、ピクチャレスクの間を夏にさまよい、緑の腐朽した家を背景に際立つピンクのライラックに大変心を奪われた。そこで、ある晴れた午後、大きな傘の下で野営し、彼は絵具や絵筆の入った箱を開け、スケッチを始めた。

このように静かに絵を描きながら、彼は痩せたとがった顔のじっと動かない目をした、乾燥したタラのような塩っぽい灰色の顔色の人が、やせて白い馬に乗ってやってくるのに注意を止めた。その見知らぬものは馬から降りた。そしてその芸術家が何をしているかについて彼の好奇心を満足させた後に、みじめな古い廃墟といったものが絵になる価値があるのかと驚きの表情をした。「もしこのようにしてのらくらして何

も有益なことを見つけられないなら、何かちゃんとしたこと、何か神を敬うようなものを絵に描いたらどうだ。私たちの新しい教会を描け―― ほらあそこの」と彼は言い、木の生えていない丘の斜面の長方形の建物の尖塔を指した。その建物には木製の高くそびえる尖塔があり、それが競争しようとしているのかと穏やかに思いながら、遠くのキャッツキル山脈の青い頂が静かに見下ろしていた。「そう、今描け。ちょうどいい時だ。先日最後の塗装をしたところだ。白いだろう！」と彼は言った。

死体だ！　と芸術家はそれを見て、震え、目を背けた。以前にも増して鋭敏に、白鉛で塗装した死んだ厚板や死んだ鉄の違いを感じた。これらと石切場から切り出されたばかりの白い大理石の違いだ。大理石は微小な雲母で輝く、あるいは年月がたち豊潤になり、多神教に慕われる別のもっと穏和な調子を帯び、その感覚は我々すべての人に感じられるか潜んでいるかである。幻のような閃光で、彼は全盛期のアッティカの完全な寺院が丘の頂でアポロの光線で輝くのを見、あるいはまわりの神聖な木立を通して垣間見られる夕暮れの平原での光景であった。当座は、この異教の夢に彼は我を忘れた。

「話せ」ともう一人の男がいらだって言った。「絵に描かないのか」

「もう十分に描かれた」と画家は言った。ため息をつきながら我にかえり、諦めたように仕事にもどった。

「あなたはこの古い廃墟に固執するのですね？」

「はい、そしてライラックに」

「ライラックだって？　そして黒い苔、幹のところだ。とっても古い。半分腐っている。花が下の腐ったところからでてくる、ちょうど腐った屋根板の軒から苔が生えているように。」

「そう、腐朽はしばしば庭師だ」ともう一人の男が断言した。

「なんて訳のわからない話だ。この乞食のような廃墟は、かつてここに住んだ不名誉な放浪者と同様、絵に描くにはふさわしくないよ」

「ああ！」と耳をそばだてて、「一体誰のことだ。話してくれ」

直ちに痩せてとがった顔をした人は、密かに勧告的な調子で、不思議にも姿を消したときにいたるまでのリップの英雄らしくない物語を語った。このことを彼は神が訪れて怠惰な堕落者を連れて行ったのだと言った。その怠け者は、大きな傘と箱を持った人たち同様、銃と獲物を入れる箱を携えていつも行ったり来たりしていた。

「ありがとう」と彼の仕事から目を離さずに、その平静な人は言った。

「ありがとう。だが我々哀れなボヘミアンはピクチャレスクのために何が出来るのか、もし自然があらゆる物の中で清教徒であり、すべての建物があの教会のようで、すべての人があなたの似姿につくられているのなら。だが、私は一体何をしているの

だ？　――ここの緑は和らげないといけない」「近いうちに天の裁きがあるよ。」と憤ってもう一人の男が言った。「そう、あなたがそう呼ぶように和らげる調子があるんだ。私の似姿で造られただって。あなたは聖書を歪めてとっているよ。両足から塵を払って不敬なお前から去ろう。」

「そうしてくれ」と穏やかに同意し、幾分悲しげに反応した。そして絵筆を休むことなく動かした。痩せた訪問者は白い馬に再び乗り、去って行った。だが間もなく、丘の道の小高い曲がり角で、馬に乗った男は、あざやかな青空を背景にくっきりと見え、ボヘミアンの視界を横切り、次の瞬間、墓に飲み込まれたかのように、下り坂に消えた。

「黙示録のあの一節はなんだ」と芸術家は独り言を言い、筆を休め思い巡らしながら、首をかしげた。「ベンジャミン・ウェストに大きなキャンバスに向かわせたあの一節？――『私は青白い馬を見た。彼の名は死』私は寓話化したり神秘化したりしない。死は墓の芝土の下にはいない。そこにあるのは眠りだ。これだけを言っておこう。今日私は死を見た。生きた馬に乗り、生きた人間のふりをした死を。彼は馬から降り、私と言葉を交わした。不愉快な人で、奇妙な威嚇者ではあるが、彼と出会ったら、出来るだけ彼と付き合わなければいけない。彼の無知は極端だから。一体この世で死のような幻が何を知っているのか、それにも関わらず、その出現はよく知っている何者かを黙って主張するのか？」

この世では運はけっこうなものだ。もしそのボヘミアンが、たまたま彼が来たよりも、２、３年後の同じ季節、現在の物語の時期にやって来ていたら、ボロ着を着たリップが、ピクチャレスな復活を果たしたところをスケッチする機会を与えられたと一体誰が知ろう。当惑し、我々が彼のもとを去った少し前でさえも、彼の家の前で途方に暮れていたリップを。

家屋敷を見る前に、リップのよろよろになった機能は、思い出すことの出来ない枝のような道、揺れる木立を覚えているように思えたところに若い穀物でサラサラと音がする野原がある、といった様々な説明出来ないものの出現によって十分に戸惑っていた。そこで、今や古い柳の木が無くなり、ライラックがとって代わったことが彼を全く困惑させた。ライラックは、完全な新参者で、それ以上近寄ろうとする彼の権利に挑戦する歩哨のようであった。

少し迷いが覚めると、片手を皺の寄った額に当て、身体は釘づけになり、半ば無意識に彼は始めた。

「まだ私の頭は混乱している。
昨夜の何杯ものワインで私は忘れた。

だが、ほら！ そうに違いない。
確かに私にはわかる。
向こうのライラックは疑いもなくある。
もっとも以前には決してリップは見なかったのに。
だが、柳はどこだ？　おや、まあ！
ここは丘の斜面だ。確かに――小川が向こうで
流れている。そして妻の家は沈黙のためにあるのみ。
そう、多分今回一度だけ。――ほら、
ゴボウがドアのところで入り込むのが
見えるか？　以前はこの辺りでぐずぐずしていただけなのに。
いや、まあ、同じだ！
だが向こうのライラック！どうして咲くようになったのだ。
リップ、リップ・ヴァン・ウィンクルはどこに住んでいる？
ライラック？――ライラック？　あそこにある。
もし私の弱った記憶が確かなら、
私は昨日の朝、ライラック市を出した。
それは繁茂し、妻と共に私のために弁護しに来た。
最も黙ってはいるけど。
見つけた。ああ、そう。
リスと天使と言うことができる。
私の頭！――誰の頭！――ああ、リップ。
私はリップ。
あのライラックは小さな挿し枝だった、
むこうのライラックは今では木だ！」

だが、なぜあらゆる方面で
道に迷った良い奴の復活を語るのか？
最も幸せなアーヴィングによって幸せに語られ、
決して温和な真実から逸れることはなく、
そして物語をもっと広めるために、
ジェファーソンによって実物通りに演じられた。
ここで、死後に起こった事を語る
のが良いと思う。

年月が経つにつれて起こったことだが
（決して人がわからないような目的で
こそこそと逃げるインディアンの列）
素晴らしい屋敷がリップの住処の光景を
無に変え、彼自身は夜に帰還した。
所有者が地歩を固めているかけがえのない木に
喜びを見出していた時、
すべては新しいのに居住者は年老いている。
リップのライラックは若さに忠実だ。
斜めのぶざまな幹にもかかわらず、
ジャンク船のロープのようにねじ曲がり黒いが、
それでも毎年若く柔らかいピンクの色で
高く花が咲く。

あの壮健な所有者は、人生の盛りをずっと以前に過ぎ、
彼の子供たちの子供たち —— みんな
リップと日なたでふざけまわった者たちのように、
楽しそうに華やかな花の房を摘んだ。
見知らぬ者はその場所を嗅ぎつけた
ボニファティウスによってワインを飲みながら語られて ——
「香りに従え！」実を言うと、
普通のライラックからは
そのような香りは漂ってこない。
低いドアのそばでその木が花開いた時、
以前には関心のなかった隣人が、
やって来て、ひとつながりの小さな挿し枝を
欲しいと言った。次々と隣人が来て欲しいと言った。
手には挿し枝から出た茎を持って
ついに、ほら、その地域は
樹陰で覆われた最初の楽園のようになった、
貧しく役立たずのリップのおかげで！

この地域は彼の名前をつけるべきだと考える人もいる。
だが、やめよう —— 花が名声を取るべきだ。

馬に乗った人が読む斜めになった道しるべは
何マイルもの緑の道を指し示す —— ライラックランドへの。

魅力に満ちた小道を馬で走ってごらん、
私の読者よ、６月の最良の時に。
リップの夢が手綱を緩めるだろう、
なぜなら彼の心は花であることがわかるから。
そしてあなたは言うだろう —— ああ、精力的な人よ、休止しなさい！
ねえ、人が人に有用性を見出せない時、
恵み深い自然が見出してくれる —— 天に祝福あれ！

テキストは以下のものを使用する。
Melville, Herman. *Weeds and Wildings Chiefly: With a Rose or Two, by Herman Melville: Reading Text and Genetic Text.* Ed. with introduction by Robert Ryan. Evanston: Northwestern UP, 1967.